

ライラさんは将棋アイドルになります 1

夕方の公園。三東幸典と金本月子は、公園のベンチで将棋を指していた。

「駄目だったなあ」

「……だめ、でしたね……」

二人の顔は冴えない。将棋が難しいから、ではなかった。

「芸能界は大変だ……」

幸典は、しみじみとつぶやいた。

三東幸典は、将棋棋士であるとともに310^{サントー}プロダクションの社長でもある。といっても、今のところ社員は彼の他に、月子しかいない。会社は三東の自宅。

「やっぱり、ちゃんとした人が……」

「月子さんも、ちゃんとしているよ」

「でも私……」

月子は、何回も首を振った。整った顔立ちにツイントール。美少女と言って差し支えない見た目だったが、

全く社交的とは言えず、いつもおどおどしていた。盤の前に座ると鋭い視線になるものの、カメラの前ではおどおどが二倍になってしまう。

「あー、こんなことになるとはねえ」

二人は何も、好き好んで会社を作ったのではない。なんやかんや色々あって、将棋界からどんどんスポンサーが撤退してしまった。今やほとんどの棋士は、副業なしでは生活できなくなってしまった。そんなわけで二人は、生きるために芸能プロダクションを立ち上げたのである。

実のところ、エースを当て込んでいた人間がいた。辻村充六段である。若手で実力があり、ファッションセンスが独特で性格は前向き。非常に芸能界向きの人間と思われていたのだが、それは確かだったようで、大手芸能事務所が先回りして契約してしまった。

もともとコネがあるわけでも、野心があるわけでもない師弟。芸能界の荒波は、二人のやる気をどんどん飲み込んでいった。今日も大した収穫なく、せめて将棋の勉強は欠かさずに、というのが現状である。

「あの……あなたたちは？ あの一、お暇でしたらお

話しませんかー」

そんな二人に、声をかけてくる少女がいた。褐色の肌、金髪、そして青い瞳。月子はしばらく、その姿に見入っていた。

「いいですよ」

三東は優しい笑みを浮かべた。唐突な少女には免疫があるのである。

「ありがとうございます。はじめましてですねー」

「はじめまして」

「あ、は、はじめまして……」

「なんか、見かけないゲームをしていますねー、なんですか」

「ああ、これは将棋って言うんだ」

「将棋ですかー。ライラさんは初めて知りましたー」

「ライラさん？」

「ライラさんですか？ ライラさんはライラさんと言いまして、生まれはアラブのドバイなのでございます。公園で知らない人とおしゃべりするのが好きでございますねー」

「話好き？」

「そうでございますです」

三東は、顎に手を当てた。新しい手を思いついた時の癖だった。

「お話しするのが好きなんだね」

「はい。ライラさんはお話しすると幸せになります」

「僕の見立てが正しければ、君は何かに困っているね」

ライラさんは、ちょっとはにかんで目を細めた。

「よくわかりましたねー。ライラさんは家を出てきたので、ちょっといろいろ困ってるでございますよー」

「三東先生、ひょっとして……」

「うん。ほんわかしているのに話好き。外国出身の美少女。あとこれは勘だけど……月子さんと同じ香りがする」

「何の話をしていますか？」

「君の可能性についてだよ。君、僕たちと一緒に仕事をしてみないか」

「ええと、ライラさんに出来る仕事がありますですか？ それはとってもありがたいです」

「あるよ。ライラさん、将棋アイドルになってみないか」

「うわー、立派な事務所ですねー」

ライラさんは、部屋を見回しながら言った。幸典は少し、ばつが悪そうに頭をかいた。月子さんすら、この部屋を立派だと言ったことはない。

六畳より少し広い空間。テーブルにテレビ、パソコンに本棚。いたって普通のワンルームだった。変わったことといえば、広めのロフトがあることぐらい。

ここは事務所とは名ばかり、幸典と月子さんの住居だった。

「まあまあ、座って」

「座布団まで、ありがとうございますです」

いつもは月子さんが座っているところへ、ライラさんはちょこんと座った。向かいには幸典、月子さんは台所でお湯を沸かしている。

「まあ、ここが事務所でもあるんだよね」

「とてもあたたかいです」

「そ、そうかな」

「壁がしっかりしていますですよー」

幸典は眉をひそめたが、なんとなく昔のことを思い出した。月子さんが来た時も、かなりへんてこだったのである。

「ところでさっきの話だけど」

「アイドルのことですか？ ライラさんはまだよくわからないのでございます」

「うん、そうだよ。言ってみれば、踊ったり歌ったり、ちょっと将棋を指したりするお仕事なんだ」

「えっ」

台所の方から、声が漏れてきた。月子さんは三つのうち一つしかできないのである。だからか、アイドルではない。

「歌ったり踊ったりがお仕事になるですか？ あと、まだ将棋が何かかわからないです」

「うんうん、今から教えるね」

幸典は、テーブルの上に布を広げた。縦横に何本もの線が引かれている。

「この 81 マスに、駒を並べて始めるんだ」

「なんか、チェスみたいですね」

「チェスは知ってるんだ」

「ライラさんはできないですけど、見たことはありますねー」

「なら、話は早い。あんな感じのだよ」

「あんな感じなのでございますねー」

幸典は木の箱を取り出して、ひっくり返した。中から、小さな駒がいっぱい出てくる。

「これが駒だよ」

「ちょっと予想と違いました。ひらべったいです」

「そうなんだ。裏返したりもするんだよ」

「リバーシブルですねー」

「そうそう」

幸典は、駒を自陣に並べていく。

「真似してごらん。できるかな」

「頑張ってみますです」

ライラさんは幸典がならべたものを参考にして、自分でも駒を並べ始めた。どちらが表かもわからないので苦労したが、それでも何とか全部並べることができた。

「よくできたね」

「ちゃんとできましたですか？」

「ああ、ちゃんとできてるよ。あ、きたかな」

玄関のチャイムが鳴った。月子さんが玄関に向かう。

「何が来ましたか？」

「すごくいいものだよ」

月子さんは、大きな箱を持ってやってきた。

「あ、あの、ピザ……です」

「ピザ！ とってもいいでございますです」

「コーラも……あります」

「なんと、大変豪華で驚きますです」

幸典は、喉を鳴らして笑った。

「懐かしいなあ」

「三東先生……どうしました？」

月子さんは訝しげだったが、幸典はいつまでもニコニコしていた。

「すごい緊張でございますねー」

「大丈夫だよ。楽しいイベントだ」

「イベントですか。いっしょに幸せになるでございますよー」

三人は、とあるビルの会議室にいた。部屋の前には大きな盤が置かれている。客は7人。名目は「将棋トークショー」だった。

スポンサー激減により、棋士の仕事は始動へとシフトしていった。しかし都心にはプロ棋士が何十人と住んでおり、それぞれが教室を開いては共倒れになってしまう。そこで「全国への普及のため」という名目で、地区ごとに指導棋士の登録が必要となり、既に登録された地域では、他のプロ棋士は普及活動ができなくなってしまった。

三東ももちろん登録を申請したのだが、他の棋士が採用されてしまった。偶然、選挙で現理事たちに投票した棋士が、各地区で登録棋士となっていった。

そんなわけで、三東も月子さんも棋士として「指導」をすることができない。そんな「登録漏れ」の棋士たちは、指導ではなく「トークイベント」という形でファンを集め始めた。いわゆる「闇指導イベント」である。

「えー、今日は新しい仲間を紹介します。ドバイから将棋を学ぶために日本に来た、ライラさんです」

「はい、ライラさんですー」

まばらな拍手。予想外のことに、ファンもまだ上記用を判断しかねていた。

「ライラさんはまだはじめばかりなので、月子さんと一緒に勉強していきましょう」

「わかりましたでございます」

「あ、はい、頑張りましょうね……」

そこからは、いたって普通の講座といった内容だった。いつもは三東と月子さんの、テンションの低い淡々とした喋りが続く。が、今日はちょっと違った。

「あ、あの……ここで必要な手があるんですよ。ライラさんはわかりますか？」

「ライラさん、ちょっと考えてみますねー。月子殿、ちょっと駒さんとおしゃべりしてみてもいいですか？」

「え、は、はい、どうぞ……」

「金さんですかー、歩さんですかー、違うみたいですねー。あ、角さんが動くと言ってますですよー」

「え……そう、いいところいってますよ」

「どこに動くですか？　ここですか？」

「そうです、正解は3三角です……」

月子さんは思った。駒に答えを聞いたら、将棋が上達することにはならないのでは？

三東は思った。なんか、面白いぞ。

イベントは一時間ほどで終わった。長引くと部屋代もばかにならないのである。

「ライラさん、お疲れ様」

「どうもですー、わたくしうまくできていましたか？」

「ああ、ばっちりだよ」

三東は満面の笑みだった。つられて、ライラさんも笑顔になった。

「ライラさん、いずれはもっと大きなところや、テレビでも仕事できるようになるよ」

「ライラさんがテレビに出ますか？　すごいですねー」

「そうなればお家賃の心配もない」

「それはたいへんありがたいでございますよ」

三東は封筒に今日の出演料と交通費を入れて、ライラさんに渡した。月子さんと話し合っ、そうするのがいいだろうということになったのだ。

「ありがとうございます。夢のようでございますよー」

「もっといい夢を見よう。気を付けて帰るんだよ」

ライラさんを見送り、三東と月子さんは同じ家路につく。

「あの……ライラさんは、仕事続けられそうですか」

「もちろん。今までいなかったよね、ああいう人は」

「あ……良かったです」

「うん。うちのプロダクションから、将棋アイドルが出るかもなあ」

「なんかすごいですね……」

三東は、握り拳を作りながら、頷いた。

「目標は、打倒道明寺歌鈴だ」